

平成29年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT29110 プログラム名 アート&デザイン：身近な素材を使って皆で織物体験
～未来へのメッセージを織り込めて



開催日：平成29年10月9日(月)

実施機関：多摩美術大学

(実施場所) (多摩美術大学 八王子キャンパス)

実施代表者：深津 裕子

(所属・職名) (美術学部・教授)

受講生：小学生1名、中学生11名、高校生7名

関連URL:

【実施内容】

・受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本プログラムは、「日本の伝統的染織技術の持続可能なテキスタイルデザインへの展開に関する研究」(平成25-27年度/基盤研究(C)/25350061)の研究成果をもとに実施した。具体的には、アジアの伝統的な衣服文化の持続可能性を先人の英知から学び、「私のくらす街」をテーマに、身のまわりに存在する細くて長い素材を用いた織物制作を行い、展示公開した。受講生が実施者とともに自然の恵みを活かした日本の衣服文化の精神を学んだ上で、受講生らの時代感覚とセンスで織物制作を実施した点に魅力と面白さがある。多数の応募があり、定員を20名から24名に増員したが、当日は5名の欠席者が生じたため、19名で実施した。

受講生に分かりやすく研究成果を伝え、自らが活発な活動をさせるために本プログラムで留意・工夫した点は、以下のとおり。

1. プログラム構成は、(1)下絵のデザイン・素材集め、(2)講義・展覧会見学、(3)実習(制作)、(4)実習(展示・講評・ディスカッション)の4つの項目とした。下絵のデザイン・素材集めを事前課題として受講生に課し、タピストリーデザインの各工程を体験してもらい、各自が創出したデザインと素材におけるオリジナリティが制作において十分発揮できるよう配慮した。
2. 実施者と受講生の交流を目的に、実施協力者(大学生・院生)が事前準備として下絵のデザインを紙に描き起こし、実習の際にも受講生の補助を行い、デザインワークにおける交流を促すようにした。
3. 講義・展覧会見学では、本学アートテークギャラリーで開催の「手の記憶/自然との共生」展 Part2 を見学しながら、日本の衣服文化の根源的なありかた、沖縄の人々の自然と共生したライフスタイル、地域の特色ある素材で布やプロダクトを作る発想を学べるようにした。
4. 実習では、受講生2～3名につき実施協力者(大学生・院生)を配置し、偏りなくコミュニケーションをとり、双方が互いに学びながら楽しく織物制作を体験できるように配慮した。
5. 実習②「大きな布を織る」では、講義・展覧会見学と事前課題から得られた成果をもとに、「私のくらす街」をテーマに4名1組(1名100cm x 30cm程度)で織物を制作した。受講生は関東地方在住者であることから、都会で生活する中で収集した市販の細くて長い素材(リボン、プラスチック製品、イヤホン)等を持参し、ユニークなタピストリー制作となった。
6. 実習③「未来へのメッセージ」では、成果物を見ながらディスカッションと講評、未来への提言を行った。

【当日スケジュール(平成 29 年 10 月 9 日(月))】

- 9:40-10:00 受付(場所:多摩美術大学 八王子キャンパス アートテーク1階エントランス)
- 10:00-10:20 開講式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明、自己紹介)
- 10:20-10:45 講義・展覧会見学
- 10:45-10:55 移動・休憩
- 10:55-11:30 実習①身の回りの素材集めとサンプル織り
- 11:30-12:30 昼食・昼休み
- 12:30-13:45 実習②大きな布を織る
- 13:45-13:55 休憩
- 13:55-14:40 実習②大きな布を織る
- 14:40-15:00 クッキータイム
- 15:00-16:00 実習③未来へのメッセージ(展示/講評/ディスカッション)
- 16:00-16:10 休憩
- 16:10-16:20 総括
- 16:20-16:40 修了式(アンケート記入・未来博士号授与)
- 16:40 解散

【実施の様子】



1. 講義・展覧会見学



2. 実習①身の回りの素材集めとサンプル織り
講義



3. 実習①身の回りの素材集めとサンプル織り
実技練習



4. 実習②大きな布を織る
作業風景(1)



5. 実習②大きな布を織る
作業風景(2)



6. 実習③未来へのメッセージ
講評風景



7. 総括



8. 展示風景
制作終了後、作品の展示風景

【事務局との協力体制】

- ・研究支援部が振興会への連絡調整と、提出書類の確認・修正等を行った。
- ・経理部及び研究支援部が委託経費の管理を行った。
- ・研究支援部が本事業の当日の写真撮影を行った。
- ・広報活動は、実施者、研究支援部、総合企画室、入試広報課が協力して本事業についてPRを行った。

【広報活動】

- ・総合企画室(大学ホームページ、SNS 発信等)、研究支援部(SNS 発信、公共施設・学校・マスコミ等へのチラシ等の配布・連絡、大学で開催のイベント等でのチラシ配布)、入試広報課(大学で開催のイベント等でのチラシ配布)、実施者が協力して近隣の教育委員会、中学・高校、美術系専科を持つ高校、美術系予備校、マスコミ等へのチラシ配布や連絡を取り、受講生募集の広報活動を行った。
- ・オープンキャンパス(7月)・高大連携授業等の多数の来場者があるイベントでは、受講対象学年の生徒や学校関係者をメインに直接、本事業についてPRをおこなった。

【安全配慮】

- ・実習の安全確保の為、受講生 2 人に対して 1 人の割合で実施協力者(学部生・大学院生)を配置した。
- ・不慮の事故等の対策の為、実施協力者には事前に打ち合わせとシミュレーション等の安全講習を行った。
- ・参加者の事故、怪我、体調不良等の対応として、大学保健室と協力体制を整えた。
- ・受講生、学生アルバイトについては、短期のレクリエーション保険に加入させた。
- ・その他の実施者については、大学にて加入の保険を適用した。

- ・作業を行う際には、作業着を着用させ、繊維アレルギーなどを考慮してマスクも準備した。
- ・受講生の食事については、アレルギー等について、事前に本人・保護者に確認した。
- ・実施前に、受講生・保護者に対し、本プログラムの概要や、実施時の写真撮影等の説明書類を送付し、予め同意を得た。

【今後の発展性、課題】

- ・本プログラムの成果物は、他地域の子供ら（沖縄県西表島の小・中学生、フィリピン共和国カリंगाの小学生）の作品と一緒に「子供たちと綴る」というキーワードで展示し、異なる民族、地域、生活環境から創出されるアート&デザインの可能性を比較展示しながら、現代社会を映し出す鏡とした。今後の発展性としては作品のみならず、受講生を含む子供たちの交流や相互理解が望まれた。
- ・事前課題における今後の発展性においては、SNS等を活用したインタラクティブなコミュニケーションを大学生（実施協力者）と受講生が行うことにより、事前学習におけるデザインワークをさらに深める可能性が示唆された。
- ・限られた制作時間に予定通りの大きさの作品を制作することができたが、ディスカッションし議論を深める時間が幾分少なかったことから、時間の確保が今後の課題である。

【実施分担者】

川井 由夏 美術学部・教授

林 ちひろ 美術学部・助手

仲澤 玲奈 美術学部・助手

【実施協力者】 10 名

【事務担当者】

佐々木 絵美 研究支援部 研究支援課・主事

長井 佑馬 研究支援部 研究支援課・書記